

「大草原の少女 みゆきちゃん」を見て

年末になり授業も冬休みに入ったし、雪と寒風の中を出歩くのも苦手なだけに、暇つぶしにネットサーフィンしていたら、動画無料サイトで数年前に民放で放映された時を見た「大草原の少女 みゆきちゃん」にヒットし、改めて見た。

知床山麓の牧場で過ごす小学1年生の少女一家の1年間の約1時間のドキュメンタリーである。

国道に出ればバスもあるが、父親はあえて原野の中を、通学路としてクマザサを刈って作った一本道を、片道1時間半の往復8 Kmを一人で歩いての登下校を少女に課す。

空にはオジロワシやオオワシが舞い、歩く前を蝦夷シカが横切る。学校近くでは、背丈以上の熊笹の急斜面を下る。

父はランドセルにクマよけの鈴をつけて、「もしクマが出てきても、普通にしていればいいから……」とだけ少女に話す。

初冬は積雪も柔いから通学は片道2時間となる。積雪が固まる冬はスキーを履いて歩き、冬の入り陽は早いだけに、午後の授業の後は家に近づく頃は闇の中を懐中電灯片手に歩く。

少女は1年間、一日も学校を休むことなく通学した。

一方、最近の報道にあるように、登下校時の小学生の悲惨な事件から、全国的に安全な通学路確保のために、町の角々に教師、親、地域の高齢者のボランティア等々が立つ姿。

北海道の原野だけにクマに出会う確立は高いのに、その中を徒歩を課すも親。

町角に立つも親。

いずれの親の姿も、子を思う気持ちは同じであろうが、「ウ〜ン」と唸るだけの自分…。

北海道の「自然という原野」、人の気持ちが荒んだ「町という原野」。

将来の「社会という原野」に分け入る力を、いずれの子どもも持って欲しいと願わざるをえないが、どちらの環境で育つ子どもが、より勇々しさを身に着けるのであろうか。

このビデオを視聴して、いずれも「子どもの命をどう守るか」と「子どもをどう育てるか」の周辺の問題が、複雑・多様に絡むだけに、一概にどうのこうのは云えず、頭の中が整理し切れるずに戸惑っている自分が、今はここにいるだけ……。

(2005年12月23日 記)